

露伴全集

第三十一卷

昭和三十一年八月五日印刷
昭和三十一年八月十日發行

露伴全集第三十一卷

頒價六百圓

著作權者

幸かろ

田だ

文あや

編纂

蝸くわい

牛ぎう

會くわい

發行者

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
岩波雄二郎

印刷者

東京都青梅市根ヶ布三八五番地
山田一雄

印刷所

東京都青梅市根ヶ布三八五番地
精興社

發行所

株式會社

岩波書店

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地

電話(代表)九段(33)八四八六番
振替口座東京二六二四〇番

牧製本

目次

折々草	明治二十三年十二月	一
潮待ち草	明治三十八年二月	八一
落葉籠		
俚諺につきて	明治三十九年九月	一九一
朝思暮想序	明治三十九年二月	一九三
詩集すひかつら序	明治三十八年三月	一九六
思軒全集序	明治四十年五月	一九七
琴の音序	明治四十年七月	一九八
古革籠	大正五年一月	二〇一
蝸牛庵聯話	昭和十三年十月	二三五
後記		三九七

折
々
草

目次

一 愉快	七
二 土屋安親	一一
三 冶工と佛師	一三
四 李伯時	一三
五 心赤髮愈白	一三
六 當成佛已成佛	一四
七 おたつ	一四
八 同巧同曲	一五
九 偶然鳥聲を聞く	一五
十 芭蕉西鶴	一六
十一	一七
十二 不讀書と讀書と	一七

十三	善人多くは孩兒	一八
十四	利休の語	一八
十五	人を議するの愚	一九
十六	鶴の一聲	一九
十七	天地悠々	二〇
十八	醒飢病貧	二二
十九	病中讀書	二二
二十	情と痴と	二三
二十一	修慈分	二三
二十二	酒	二五
二十三	天意	二六
二十四	風車	二六
二十五	四種慾	二七
二十六	理に達するの人	二八
二十七	損益	二八

二十八	人情	元
二十九	篠崎東海の言	三〇
三十	蓼太が五月雨の句	三〇
三十一	白雨	三一
三十二	夜半の鐘	三三
三十三	みつ巴	三四
三十四	戦時の詩人	五〇
三十五	將棋	五四
三十六	わが失敗	五六
三十七	鬼語	六六
三十八	雪中庵蓼太	七〇
三十九	神功皇后	七〇
四十	平賀源内	七一
四十一	林和靖	七二
四十二	陳眉公の奇言	七三

四十三	甲州流軍學	七三
四十四	徂徠	七四
四十五	氣質	七四
四十六	劇評を求めらるゝを辭するの書	七五
四十七	散亂心	七七

一 愉快

試みに心のたのしさを數へむ。

一、旅行たびりの空に月を越え年をかさね、さまざまの憂き事つらき事に逢ひつくして、人の心の冷やかなるさま、錢の力の大きなることなど悟り、懐ふところ寒く袖露あせけき荒野あらのに浮世の味をつくくからきものぞと知り、今は松風蘿月しょうふうらげつを友とし片里の小菴せいらのこそうにも身を幽かすかに終りなんと思ひたるが、故郷ふるさとに歸り來て我家わがやの前の柳の樹まづ眼につき、内に入りて久しぶりにて母上ははあふが縫ひ玉ひける蒲團ふとんにくるまりて安やすくと寐ねたるうれしさ。

一、昔しは共に物あらそひなどしたる友だちに、思ひ寄らざる旅の空にて逢ひたるうれしさ。

一、生命いのちは何程ぞ、夢中に飛ばせし何年、今さら取り戻しはならず、口惜し／＼勵め／＼と怠りがちの意馬いばに鞭むちち、漸く半日ほども餘念なく學びたるに、肩も凝り眼も疲れたる折ふし、豫て知れる美人の問ひ來りて、向島の園育ち、姿はいやくも香は高きこのはな君が瓶中びやうちゆうに收められなば嬉しかるべしなどと打笑うちあはながら贈りくれたる早梅、其ま譯もなく床の間の瓶びんに投な込こめて共に眺め澁茶いしばい一盞

に談話はなし一ツ二ツしたるうれしさを。

一、三四里離れたる所に閑居せる友を訪ふて、互におもしろく風流の話し修行の話しの間に一ツ二ツは浮世の戀ものがたりなども交り、誰に遠慮なく高笑たかわらひしたる揚句、飯時になりて菜さいごしらへも主客の別わかちなく共にはたはらきて、然も作り出せし煮物の鹽からきに眉皺まゆわだかめし可笑しさを。

一、顔の色うつくしき十一二歳の男の子に、八百善の料理せし肴食はせても左程よろこばず、淺草公園の賑やかさ見せても嬉しがりもせざりしが、我畜わがかひし小犬を欲し氣けなりし故それを與ふべしと云へば、眼中一段の麗はしさを増し、罪もなく笑かたまげ、はや我ものぞと其犬の頭を摩なで首筋を抱きて樂しみ深そうにしたる長閑のどかさ。

一、恐ろしく峙そだ立る巖の上に我たゞひとり突立つたば、長風裾を煽りて袂たもとに満ち、脚下に騒ぐ雌浪雄浪、折から差し來る潮の勢にいよゝゝ烈しく凄まじく、濤うしほどつと一打うちするどく、碎けて飛ぶ白玉のバラリと虚空を掠めて落ち、満身濡れ浸りたる心よさ。

一、思ひもかけぬ山道に踏迷ひ、行けどもゝ森くらゝ霧たちこめて、方角を失ひ目當めあてを忘れ、腹さびしく心細く、おぼつかなくもひとり歩む中、日はつれなくも我を見捨てて、天地薄墨色となり杉の葉の風に鳴る氣味悪さ。今は絶體絶命と觀念しても勇氣少しもなく、懷中水を湛たみふるごとく寒を覺えし時しもあれ、幽かすなる火の光を見つけ、それにたよりてあばらやを得、やれうれしと思ひながら

如何なる人の住ふ事かと怯ろしく、こわく戸をたゞきて難澁の仔細語れば、親切なる老婆の出來りてそれは〜お困りなりしなるべしと、やさしき言葉かけられたる悦ばしき。

一、おもしろからぬ俗事に身を疲らし心をわづらはせたる後、夜ふけて燈火かすかなる一室に鏗ざる刀抜き放して、手元より帽子先まで切先より鏗際まで幾度か見送り見迎へ、頓て突立あがり、ひと揮りふた揮り打揮つて虚空を切る音を聞きたる心よき。

一、年老たる法師の安らかに經よむを靜に聞居たる中、何事も自然と忘れ、唯々香烟の肝に染たるありがたき。

一、五歳か四歳の女の兒が黥を池の中に幾個ともなく投込て、鯉龜などの食ふさまを餘念なく見入りたるあどけなき横顔のうつくしさを望みたる。

一、終りは知られぬものながら蝸牛の長閑に這ひあるく様子の風流なる。

一、作り話しを實の事と心得、頻りに鼻の頭油ぎらせて田舎人の語るを聞居たる。

一、夏の日はげしく窓を射て書齋に黙坐するも中とつらく、朝鮮團扇に水うつて自ら扇ぐも暑さ凌ぎ難く、氷水呑むも汗ばかりいたづらに湧て効なき折しも、思ひ切て手拭と浴衣引提、恐ろしき炎天を傘なしに急ぎて歩み、湯屋に行て肉もはじける程あつき湯の中に躍り込み、少時齒を噛みしめて苦しきを我慢したる後出で來れば、滿身紅をぬりたるやうに赤く、汗は玉なして一時に流れ去る、

尚又微温湯にて髪洗ひ果たる揚句、犢鼻褌一つしたばかりにて椽側に突立ち、頓て糊強く付きたる浴衣を着たる心よき。

一、庭前に只一樹の梅が香、夜半の寢覺の枕に通ふおもしろさ。

一、片田舎の學校のあたりにて無下に衣服もきたなき兒等が打つれて遊びながら、同音に鄙びたる聲はりあげて君が代歌ふ有り難さ。

一、白髮頭の漁夫老ぼれたるが、酒に酔て昔時の態をあらはし、放言豪語、風雨を叱咤し波浪を喝退する勢猛く、坐客辟易すれども關はず、終には其處に倒れ臥して雷の如き鼾の聲、傍に居て其爺の何を夢みて居るかと考ふるおもしろさ。

一、草鞋のはき心よき。

一、美人に給仕さするは云ふまでなく嬉しけれど、よしや美人ならずとも物ごし言葉やさしき女の、厭な顔せず給仕するはいとうれし。

一、廣い野面いつばい繁り合へる草の葉末に、一と露の玉なして、天上唯一輪の月の千萬となり、一其露の中に宿れる景色、露滋しどうまあ月を踏分う。

一、雨の日友達の筆のあと心の趣きを見る。

一、雪の夜粥をすゝりて舊き我が旅の記を繰り返し見るに、彼の山此の川眼の前に徘徊するおもしろ

さ。

一、風さはがぬ朝早く起て袖寒きを冒し、靜に歩めば落葉ひらくとひるがへり、魂魄引締るやうなる初冬のさびしさ。

一、眼をとめて飛かふ螢を見れば、或時は光り失せて又しばらくして光り出る、其光らぬと光るとの間は我命の終りの様かとも見えて、いと尊くあはれふかし。

一、浪の上にあかくとさしのぼる日を拜む時。

一、親類友達などの消息得たる時。

一、借金をかへしはてたる時。

二 土屋安親

土屋彌八安親後入道して東雨といふ、鑿工に妙を得て宗珉と雙び稱さる、實に一世に冠たること能はざるも亦百年に誇るに足るの手腕を有せる英靈底の漢たり。其或人に與ふるの書中に曰く、
何事も技倆を好く致し度いはば心のむさき事なきやうに是第一なり、細工人は一生貧なるものと心得、つねに心のよごれぬやうにいたしたくひ

と。嗚呼是れ東雨が東雨たる所以のものにあらずや。貧苦も富貴も東雨が鐵桶の如き胸郭を穿つ能は

ず鑽るあたはず、而して其鐵桶中に能く蓄へられしものは唯眞に美術國裏に住せる人のみ採り醸し得べき其國の花の蜜のみ。富を欲するも心のむさきなり、名を欲するも心のむさきなり、道に協はむ善に與せむと欲するも亦心のむさきなり。さる人の胸郭は海綿の如く孔多くして何者をも能く浸漸透過せしむる代りには、決して最も良きものを醸し出すことあたはざらむ。

三 冶工と佛師

美術家も人なり、故に美術家たるの故を以て其人の放逸無慚を免すあたはざるは勿論なり。されど人間のひととしては飽まで人間たらざるべからざる如く、美術家のひととしては飽まで美術家たらざるべからず。さるに美術家のひととして有すべき覺悟にまで人間のひととして有すべき覺悟を闖入せしめ難居せしめ、或は内の覺悟を逐ふて外の覺悟に代らしめんと欲する者あり。かゝる輩は全と片とを辨せず、統と偏とを知らざるものなれども、人間一般の上より見れば毒を流さざるに似て其實美術界に太甚しき弊を貽るものなり、況や區々たる小笠原流のごとき禮式を以て正宗貞宗が膝を律し運慶湛慶が居ずまひを糺さんとするに於てをや。嗚呼冶工は冶工の膝の立やう、佛師は佛師の坐りやうあり、假令神の前佛の傍に至るとも其鎚を把り其鑿を持するに當つては諸肌脱ぎ大胡坐かきて何の憚るところかあらむ。詩人の如きは能ふべくんば基督にも教へ罹曇にも教ふべきものならむ、彼等が唾壺を捧げて

不死の神丹ふししのうたぬ道裏みちうらにありと受賣する千金丹の賣子然たる輩に教へらるべきものにはあらず。

四 李伯時

李伯時初めは馬を畫きて後は觀音を描く、然るに之を賞する白痴漢あり、悲しい哉。馬を畫きたる時と觀音を畫きたる時と相較かひかくし前の技拙にして後の技巧たぎふならば賞すべし、唯だ前には畜生を畫き後には菩薩を畫きたる畫題其者の卑高小大の故を以て或は貶へんし或は褒ほさば、馬を鑄成いたなしたる黄金と菩薩を鑄成したる黄金と同じ黄金なるを知らで、一を眞諭まゆといやしみ一を眞金と尊む兒女の分別べつべつに均ひとしかるべし。今の多數の批評家は李伯時にすゝめて菩薩を描かしめんとするの人なる哉。

五 心赤髮愈白

心は一腔の火に似て髮は數莖の雪の如し、利害相摩鑽まし心赤くして髮愈々白し、冉ぜんくと歳暮の人忽ち爲なる行路の客と、此詩何の巧處奇處なく却て拙處凡處あるを覺ゆ。然れども予此詩を愛す、而して何の故なるかを知らず。技を以て論ずれば素より價なし、想を以て論ずるも亦異なし。さるに唯だ漫然として之を愛するは、畢竟嬰兒の或人を見ては泣き或人を見ては笑ふが如き不思議の感に我が胸中を領せらるゝに因るか、或は又詩果して好き歟か。詩は濬元に出でたり。